

「豊臣期大坂図屏風」に描かれた堺

長谷 洋一（関西大学教授 / なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）

関西大学の長谷でございます。よろしくお願いいたします。

オーストリア第2の町グラーツにあります州立博物館ヨアネウムの一つ、エッゲンベルク城博物館に所蔵の「豊臣期大坂図屏風」は、先ほどからごらんいただいていますように、大坂城を中心といたしまして住吉大社あるいは大坂の町を描いた屏風でありまして、京都の宇治、あるいは、今日お話いたします堺までが描かれていて、さまざまな点から検討を加えることができると思います（図1）。

今回、私は屏風の第1扇、2扇の上部にあります、一番右上のところの堺の景観について少しお話なり、検討を加えていきたいと思っております（図2）。

まず、画面の観察から行いたいと思います。住吉大社からの祭礼の行列が右側のほうへ進んでまいりまして、先頭に馬に乗った人物が橋を渡っています。橋を渡りますと、すぐに市街地に入りまして、井戸とか、その奥には寺社と見られる赤い柱と白い壁を持つ建物などが描かれておりまして、手前のほうには住吉浜と呼ばれる浜が描かれています（図3）。



長谷 洋一氏



図1：「豊臣期大坂図屏風」（エッゲンベルク城博物館蔵）

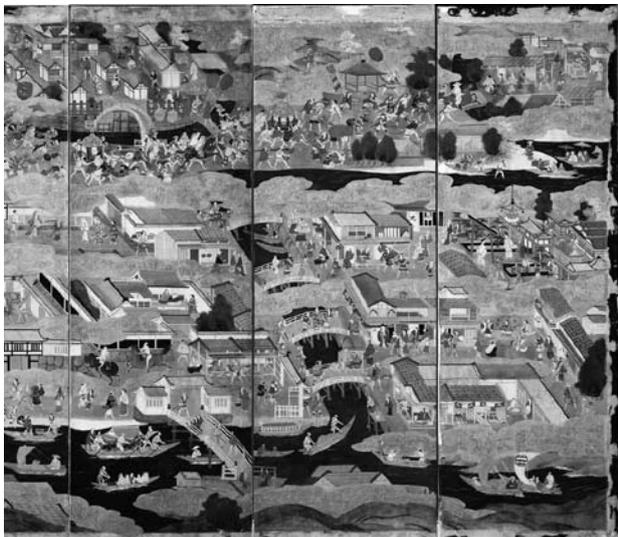


図2：「豊臣期大坂図屏風」
（エッゲンベルク城博物館蔵、部分）



図3：「豊臣期大坂図屏風」
（エッゲンベルク城博物館蔵、部分）

実は、橋の下に流れるのは、ただ単なる川ではなく、堺の町をめぐる環濠の一部とみられておりました。実際に住吉からの屏風全体から見ますと、住吉の右側、実際の方角で言いますと、南側に当たりますけれども、環濠を渡って町に入るといふ、環濠があった町ということは堺以外にありませんので、これが実際堺の町の入り口だということが再確認できるということです。

さて、堺というものは、ご存じのとおり、16世紀に国際貿易都市として栄えた町であります。1598年のオルテリウスが描きました日本図の中にも、堺という文字と、都という文字がありまして、当時、国内外の貿易で栄えた町であることはよく知られております(図4)。

こうした町でありますから、16世紀、まさに豊臣期大坂城のこの堺のイメージというのは地名だけにとどまらず、さまざまな宣教師の記録からも堺の町の様子が描かれております。

一つはガスパル・ビレラが記しました宣教師のところです。永禄5年(1562年)の報告の中で、当時、日本全国、堺の町より安全なところはないんだと。「他の諸国において動乱あるも、この町にはかつてなく敗者も勝者もこの町に在住すれば、皆平和に生活し、諸人相和し、他人に害を加えるものなし」ということになります。

その後、有名な言葉でありますけれども、「町は甚だ堅固にして、西方は海を以て、また他の側は深き堀を以て囲まれ、常に水充滿せり」という記録があります。

同じように、ルイス・フロイスの『日本史』の中にもこういう記事がありまして、「ミヤコと堺とではどの市街にも二つの門があるのが慣いで夜にはこれを閉じた」という記事があります。

このことから、中世堺のイメージといいますのは、堀で囲まれている、あと、もう一つ木戸があるという、大きな特徴としてこの二つを上げることができると思います。

これが現在の堺の航空写真であります(図5)。おわかりづらいかもしれませんが、ちょうど堀に囲まれた、上の方が、東側になります。東側は今、阪神高速道路になり変わっておりまして、土居川という堀がめぐってございましたけれども埋め立てられ、南側、画面向かって右側と下側のほうは一部残っております。ビレラ、あるいはフロイスが記しましたような三方を堀に囲まれてというのは、まさにこの画面で当たるわけあります。

そのほか、これは1735年の堺の地図であります(図6)。やはり下のほうが西のほうに当たりますので、西側



図4：1598年オルテリウス/ティセラ日本図(堺市博物館蔵)



図5：堺市街航空写真(個人蔵)



図6：「堺大絵図改正綱目」(享保20年〔1735〕堺市立図書館蔵)

は海をもって、三方は堀に囲まれて、中に碁盤の目のように、街区、町並みが続いているという図になっております。

ちょっと遊んでみまして、この地図と現在の航空写真を合わせてみますと、ぴったりと一致するわけでありまして、こういう形で現在も、多少、中央の道路は拡張、広げておりますけれども、こういう町並みをしております。

しかしこの町並みが、実は、16世紀、ビレラあるいはフロイスが記述した町であろうかという疑問が一つあります。

これも同じように、19世紀に入りました地図で、同じような形になっております(図7)。そうしますと、同じような今の町、あるいはこういう18世紀、19世紀に描かれた堺の町が中世そのままを留めているのかということちょっと考えてみたいと思います。

結論から言いますと、それは留めていないということになります。16世紀、フロイス、あるいはビレラが記した堺の町、それ以後の堺の町というのは幾多の災難といえますか、災害に見舞われております。

まず、1586年に秀吉によって堀が埋められます。現実には、後で申し上げますけれども、一気に埋められたのではなくて、徐々に埋められていったということが発掘調査によってわかっております。

その後、1615年4月28日に大坂夏の陣の前哨戦ということになりまして、豊臣方の大野道犬斎という人が堺に火を放ちまして、堺の町というのはほぼ全焼をいたします。

その後、徳川幕府の世になりまして、復興を果たしていきます。それで、1689年に先ほど見ていただいた古地図の大もとになりました元禄2年の「堺大絵図」という、非常に大きな地図ができ上がってまいりまして、ほぼこれが堺の町の復興の完成と考えております。

その後も、1704年には大和川が現在の柏原市、八尾市、東大阪市と北へもともと抜けていった川を柏原の出口のところで西のほうに抜けまして、大和川から運ばれた土砂によって堺の港は浅くなって、港の機能を果たさなくなっていったというのが筋書きであります。こういったような災害、あるいは災難を堺の町は受けております。

それで、もう復興が終わりました江戸時代の、高志養浩という人が堺の町について記している報告があります。『全堺詳誌』という報告でありますけれども、その中で、実は次のように述べておまして、「往古ノ町並、只今ノ様に筋通り申さず、東方公田ヲ堺町中ニ入ラレ町家ニナル」という記述があります。東側と申しますと、今の地名で言いますと、農人町という地名が残っておりますけれども、そのあたりになります。

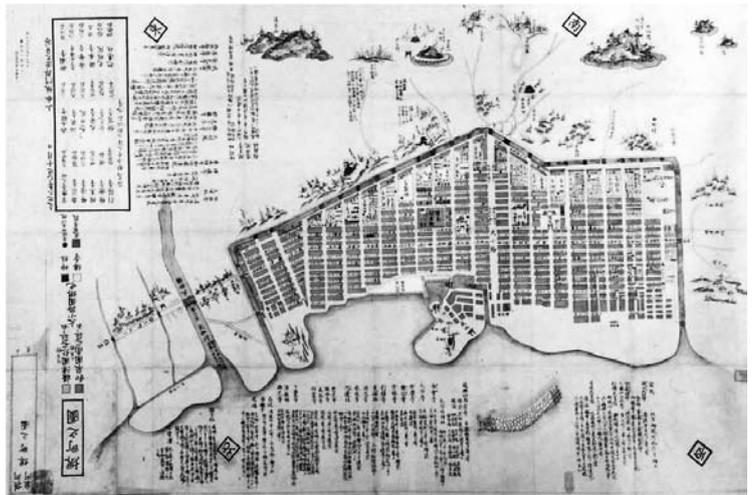


図7:「摂州泉州堺町之図」(写本・文化2年〔1805〕堺市立図書館蔵)



図8:発掘の様子(1)

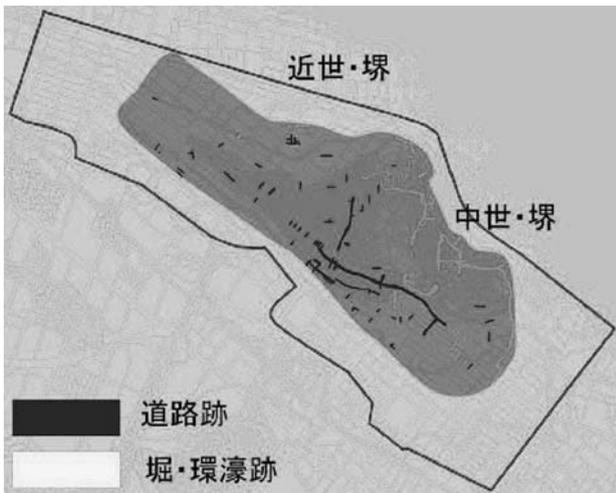


図 9：発掘の様子 (2)



図 10：発掘の様子 (3)

大事なのは、実はまさにこの地図に書かれた堺の通りというのは、往古のは筋を通っていない、違うということが一つ大きな要素として上げることができると思います。この地図では中世の堺というのはイメージできないということになります。

実は、堺市教育委員会を中心といたしまして、先ほどの三方を堀に囲まれた町の中を発掘調査をここ 30 年近く調査をしております (図 8)。それによってわかったことといいますのは、30 年ほど前はもう既に高いビルが建っていたり、さまざまなこういう災害を受けていますので、中世の町はなくなっていたんだろうという認識でありました。けれども、今の地面から 1 メートル 20 から 2 メートルぐらい掘りますと、ちょうど大野道犬が火をつけた地面が出てまいります。真っ赤に焼けた土の層が出てまいりまして、その焼け土を取り除きますと当時の建物の跡、蔵、道路、溝、あるいは環濠、遺物にしまして、国内外の陶磁器など、さまざまなものが出ております。そうした発掘によって、秀吉によって一気に堺の環濠が埋められたということではなくて、徐々にわずかず、どんどんと埋めていったということがわかっております。

大きく注目したいのは、まさに高志養浩が指摘したとおり、先ほどの基盤の目のような堺の町並みとその焼け土の下から出てくる街区、家の方向、町の方角とは全く異なっていたことです。

ちょっと見にくい図でありますけれども、黄色で示してありますのが堀ですね。堀と溝とどう違うのか、と言われると非常に困るんですけれども、大体、幅を 2 メートル以上のものを堀と考えていただければよいかと思います。それが黄色で出ております。青色が道路の部分になっておりまして、これが発掘によってわかっておりました (図 9、10、11)。



図 11：発掘の様子 (4)



図 12：「住吉祭礼図屏風」(堺市博物館蔵、右隻)



図 13：「住吉祭礼図屏風」
(堺市博物館蔵、堺市街部分)

そうしますと、先ほどの堺の地図で見た三方を堀に囲まれた中世の堺の町というのは、実は一回り小さいですね。こういうようなものが中世の町ではなかったかということが今考えられております。

こういうような中世の堺の町の特徴、あるいは堺の歴史的な変遷というものを念頭に置いていただきまして、そろそろ屏風の話にならないといけませんので、屏風のほうにいきたいと思えます。

現在、堺の町を描きました一番古い屏風といいますが、堺市博物館が持っております「住吉祭礼図屏風」であります。これは6曲1双でありまして、片方のほうには住吉社を描いておりますけれども、右隻のほうには、堺の町並みを描いております(図12)。

少し拡大をいたします。ここが堺の入り口であります。中央に流れている川は細井川という川であります。その川を渡りますと、ちょうど画面の向かって右側のほうに堀がありまして、木戸が立っていることがわかりいただけます。ここが木戸になりまして、ここが堀になっております。こういったもので、まさにフロイス、あるいはビレラが記したようなものであります(図13)。

この屏風の制作年代、あるいは描かれた年代というのは1615年から20年、まさに堺が焼け野原になったところの景観を描いております。したがって、中世的な要素あるいは江戸時代の要素も少し含み、あるいは古い堺の町並みを描いているということで、非常に折衷的なものでありますけれども、大体1630年から40年ぐらいに描かれた屏風ということで理解されております。

もう一つ屏風を出します。これは個人がお持ちの巖島神社と住吉祭礼図を6曲1隻に描きました屏風であります(図14)。これは住吉側でありまして、これもやはり画面の第1扇、第2扇、向かって右の端のほうに堺が描かれておりまして、住吉の延長に堺があるという認識があります。

ちょっと拡大いたします(図15)。これも同じく見ていただきますと、川が流れていまして、橋を一つ渡ります。



図 14：「巖島・住吉祭礼図屏風」(個人蔵、右隻)



図 15：「巖島・住吉祭礼図屏風」(個人蔵、堺市街部分)



図 16：「摂津国名所港津図屏風」
(堺市博物館蔵、堺市街部分)



図 18：「天橋立・住吉社図屏風」(個人蔵、拡大)



図 17：「天橋立・住吉社図屏風」(個人蔵、右隻部分)



図 19：「天橋立・住吉社図屏風」(個人蔵、左隻部分)



図 20：「天橋立・住吉社図屏風」(個人蔵、拡大)

その次のところへ行きますと、堀が渡されまして、木戸があって、そこから堺の町並みに入っていくという描写になっております。同じような形で北の端の堀、北の環濠と木戸がセットになっているということなんです。

もう一つ、これはやはり堺市博物館が持っております「摂津国名所港津図屏風」という、堺から須磨までを、大阪湾の中心に視点を置きまして、ぐるっと描いた屏風でありまして、同じく右端に実はこの一番上の右の上の小さいところに堺が描かれておりまして、拡大をいたしますとこういう、ちょっと見にくいですが、やはり環濠がありまして、橋がかかって木戸があるということになります(図16)。

そうしてずっと見ていきますと、堺の町のイメージというのは、町に入っていく直前に環濠がありまして、北の環濠があって、門、木戸があるということが大きく理解できるわけでありまして。

もう一つお見せしたいと思います。これは同じく住吉社と天橋立を描いた屏風でありまして、なぜ天橋立かはちょっとよくわかりませんが、こういうセットで描かれております。8曲1双という非常に大きな屏風でありまして、これは右隻ですね。向かって右側の隻であります。こちら側からずっと始まりまして、この端が北のほうに続いてまいります。住吉浜で宴を張っております、堀があるわけですし、木戸がかかっていないということになります(図17)。これが拡大のほうになりますね。こういう形になります(図18)。

これがもう一つの天橋立のほうになります(図19)。これを見ますと、実はこの上のところに武士が座ってお城の中に入っているとしております。天橋立でありますから、お城は多分、宮津城と考えられます(図20)。そう

しますと、この光景といいますのは 1669 年に永井尚征が宮津城に入城した光景であると言えますので、この「天橋立・住吉社図屏風」というのが、このあたりの時期と関係してくるのではないかということになります。

もとに戻りまして、グラーツの屏風であります。よく見ますと、実は北の環濠がありまして、橋がかかっておりますけれども、門、木戸が描かれていないことになります。それは今見ました「天橋立・住吉社図屏風」と同様であります。こういった形のものになりまして、先ほど来見てきた住吉祭礼図とかにある、堺のイメージであるところの門、木戸が書かれていないということになりまして、どうもグラーツの屏風というものは中世の堺のイメージではなくて、住吉の延長にある、堀のある堺の町というイメージでとらえられていたということが考えられるのではないかという気がいたしております。

これにて、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

※図版 4、16 は堺市博物館編『堺市博物館優品図録』（2001 年）より転載した。

※図版 6、7 は堺市博物館編『堺と三都』（1995 年）より転載した。

※図版 8、9、10、11 は堺市博物館編『博多と堺』（1993 年）より転載した。

※図版 12、13 は堺市博物館編『住吉大社—歌枕の世界—』（1984 年）より転載した。

※図版 14、15、17、18、19、20 は「日本三景展」実行委員会編『日本三景展』（2005 年）より転載した。